

霊

れい

聲

せい

2006年5月(第168号)

北米ホーリネス教団

OMS Holiness Church of North America

www.omsholiness.org

reisei@omsholiness.org

御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。(コリント第一 2:13)

「幻のない民は、滅びる」(箴言一九章一八節)

常務委員会議長 山下ゲーリー

この度、神様が私の心に示してくださったことを、皆さんに分かち合う機会が与えられたことを心から感謝いたします。

私は、一五年間に亘って常務委員として奉仕してきました。今、私たちの教団は、素晴らしい変化の時にあります。神様が私たちに立ておられる計画は、とてもエキサイティングなことです。

私たちはどこから来たのか

これから将来のことについて話をする前に、今日までの私たちの歩みについて概観してみたいと思います。私たちの教団が創立されてから八〇年が過ぎましたが、その歴史はとても豊かなものです。私たちのルーツは、日本からの移民が始まった頃にまでさかのぼります。その時代、日本語を話す人たちは、ほとんどのアメリカ人のキリスト教会では歓迎されませんでした。そこで、日本語を話す

クリスチャンの集まりとして、私たちの教団がスタートしたのです。私たちの教団は、日語部がその基礎を作り、初期の歩みを支えたのです。その後、教団が成長するに従い、英語部が加えられていったのです。

今日、英語部は教団の大勢を占めるようになりました。人数的に多くなり、民族的にもより多様になりました。一方で日語部は、日本からの「移民」というものがなくなり、信徒の高齢化に伴い縮小しました。しかし、日本からの留学生やビジネスマンとその家族を教会に導くことによつて新たな成長を見ました。

私たちの教団以外にも、日本からの移民によつて作られた、英語以外のことばを話す教会がありました。しかし多くの場合、二つの言語の違い、世代の違いを持ちながら一つの教会として成長するというユニークな形を失ってしま

ました。そして教会が、英語だけを話す教会になってしまいました。私は、神様は、私たちの教団と教会に、そのようなことが起こって欲しくないと考えておられると信じています。

ビジョン

二〇〇二年の総会において承認された、教団のミッション・ステイトメントについて記します。

「私たちの使命は、日本人を祖先とする人々と共に、世界のすべての人々に、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために、愛と信仰の共同体を建て上げ、養うことです。」

このステイトメントは、私たちの過去を認識すると同時に、私たちの将来をも認識するものです。

「世界の全ての人々に」とありますが、アメリカで救われた日本人学生および日本人ビジネスマンとその家族が日本に帰国したとき、日本の伝道のために用いられるように、そこに、神様がこの教団を置いた意味があると信じています。そして、これは英語部と日語部が

(2ページへ)

(1ページより)

強固な絆で結ばれる時にだけ遂行できるものです。

それでは両者の協力関係とは、どのようなものでしょうか。最も明確なことは、財政的な協力です。日語部の成長は、一時滞在者への宣教によつています。ですから財政的には、減少するでしょう。これは二つの部を持つ一つの教会として、それぞれの教会が受け留めなければならぬチャレンジです。私たち英語部のメンバーは、その財源がどこにあるかにかかわらず日英両語部によつて財政が共有されることを認識しなければなりません。共通の認識を持つ最も容易な方法は、会計を一つにすることです。

日英両語部の協力関係は、共同の財政を持つことから始まります。単に財政を持つことではなく、共同の財政です。

私は、私たちが将来も存続するかどうかは、日語部と英語部との協力関係によると考えています。

サンロレンゾ教会の例

日英両語部の協力関係がどのよ

うに出来るかを、私の属するサンロレンゾ教会の例をあげて説明したいと思います。非常に分かりやすい例として日語部の島田直師の存在があります。彼は、もともとゴールデン・ゲート大学の留学生としてアメリカへ来ました。そしてサンロレンゾ教会でキリストを受け入れました。彼は日本へ帰国し、神学校を卒業して牧師になりました。そして日本で牧会をしながら人々をキリストのもとに導いていました。

しかし、神は彼をアメリカへ呼び戻しました。それは日本人留学生や日本人ビジネスマンとその家族をキリストのもとに勝ち取り、彼らが福音を広めるために日本に帰るためにです。彼が私たちの教会へ戻つて来て以来、彼は、日英両語を話す学生や、求道者、姉妹教会の方々のために日曜日の夜に集会を始めました。

もう一つの例として、私たちの教会には、外国人学生への伝道に重荷持っているジェフ・チャンという若者がいます。彼は、カリフォルニア州立大学の外国人留学生に向けたプログラムを持っていま

す。このプログラムは、カストロバレーの大きな教会と協力して、毎週夕食を共にしながら交わることによって成長しています。彼はサンロレンゾ教会とも関わっているのですが、サンロレンゾ教会が主催して、日英両語のメンバーと学生たちが、夕食を共にしました。日本人学生のうちの数人は、サンロレンゾ教会の日語礼拝に出席し始めており、さらに日曜日の夜の礼拝にも出席しています。

最後にもう一つの例をお話しします。細見師が私たちの教会で奉仕していた時、細見夫人が、教会で「ラムズ・クラブ」を始めました。これは日本語を話すお母さんと幼い子供たちに向けたプログラムです。この毎週金曜日にもたれるプログラムを通して、お母さんと子供たちが教会の交わりと礼拝に導かれました。このプログラムには、英語部のメンバーも参加し、今日まで続けられています。

これらの三つの例は、私たちの教会が日本語を話すコミュニティーにどのように宣教したかという例です。それぞれの働きは、日英両語によるものです。私は、それ

ぞれの教会がアウトリーチの方法を持ち、多くの利用可能な例があると確信しています。

これらの留学生、ビジネスマンとその家族への宣教には終わりはありません。私は、アメリカでキリストを受け入れた人々の一〇%しか、日本で信仰を持ち続けることが出来ない聞いています。家族と廻りの人々からの圧力は、クリスチャン人口が一%未満の日本において非常に厳しいものがあります。これは、日本に帰つてから遭遇する困難のために、新しくクリスチャンになった者たちを整える必要があることを意味しています。彼らをキリストの弟子とし、日本への帰国に備えるのです。

また私たちは、日本で働く宣教師を支援しなければなりません。私たちの教団は、篠田リリアン宣教師を日本に送っています。それぞれの教会でも日本で働く宣教師をサポートしているでしょう。これは私たちの果たすべき責任の重要な一部分です。私は、神様がこの教団に特別な務めを与えてくださっていると信じています。

(5ページ末尾へ)

「神のなさることは、すべて時に
なつて美しい。」(伝道者の書三
章十一節)

ホノルル教会に遣わされて一年
が過ぎた。あつという間のようで、
一年前がはるか昔のようにも感じ
られる。

日本で牧会をしていた時は、ア
ルバイトをしながらの牧会だった。
教会のために思ように時間がとれ
ないジレンマを感じながらも、こ
れも主の時、主の訓練と受け入れ
ていた。今一番感謝なことは、本
来の働きをフルタイムで出来る
ということだ。主の働きが出来ると
いうこと、これは決して当たり前
のことではない、主の恵みによる
ということを感じる。

今から二二年前、一九八四年に
私はサンタクララ教会で受洗し、
教会の祈りとサポートに送り出さ
れて聖書学院で学んだ。学院で出
会った妻のれいは、卒業後一年間
ホノルル教会で奉仕させていただ
いた。それは今から一七年まえの
こと、当時は中野師一家が住んで
いた牧師館にステイしたが、なん
と今度は四人の子供を連れて、そ

の牧師館に住むようになるとは、
誰が想像できただろうか。まさに
夢を見ている者のようだ。

「人の心には多くの計画がある。
しかし主の計りごとだけが成る。」
(箴言三章六節)

新任牧師の紹介

神のなさること

関 真士(ホノルル教会 副牧師)

当時日本で牧会をしていた私に、
教団から声が掛かったのは三年半
まえのこと。初めて聞いた時には
本気にはできなかった。しかし、
かつて海外在留の日本人に対して
持っていた重荷が、心の奥底から
むくむくと出てきた。これは新し

く外側から来たものではなく、内
側から湧いてきたという感覚だっ
た。その時、神の召しは変わって
いないということを悟った。

その後、話ほとんどん拍子に進
んだかというところでもなく、二
回の牧師リトリートにインタビュ
ーに来たが、それでも任命先は決
まらなかった。結局、お話をいた
だいてから、ホノルル教会に任命
されるまで二年半かった。

私の人生には、「今だから分か
る」ということが多い。この二年
半という期間もまた、私や家族に
とって、確かに必要な期間であつ
た。この期間にあつた主からの取
り扱い、訓練、チャレンジを抜き
にして、今を迎えることは有り得
ないことだったと、今だから分か
る。

「私たちが滅び失せなかったのは、
主の恵みによる。」(哀歌三章二二
節)

一年前の四月一五日に私達家族
はホノルル空港に降り立った。鈴
木先生ご夫妻をはじめ、教会の
方々の暖かい歓迎に接したのを昨

日のように思い出す。日本の時と
は違い、大きな歴史のある教会で
の牧会に戸惑いながらも、鈴木先
生のご指導と教会員の方々の忍耐
のゆえに守られてきた。

日本にいた時に、これをしたい、
あれもやりたいと思っけていても出
来なかったことが、ハワイに来て
全て実現している。夫婦や子育て
に関する学び会や小冊子を書くこ
と、最近では、とりなしのチー
ムや、聖書学院の講義をDVDで学ぶ
クラスが出来たり、何よりも一年
のうち四回も洗礼式を持つこと
が出来た。受洗者の中には長男が
含まれている。今現在、鈴木師ご
夫妻はサバティカル休暇を取られ
て日本に滞在している。留守の三
カ月の間、多少不安もあつたが、
教会のかしらであり真の大牧者で
ある主に全てをお任せしている。

ハワイでの生活は、まだまだ始
まったばかりだが、近所には中野
師ご夫妻や学院時代の同窓の中村
師ご夫妻もおられる。たくさんの
方々に支えられ、おまけに広い牧
師館で子供たちは今日も元気に走
り回っている。本当に主の恵みと
あわれみに、ただ感謝を捧げる。

日本開国に貢献した人々

北米日系史 その

オレンジ郡教会牧師 杉村 宰

この度シリーズでアメリカ日系史をしたためる事に相成った。ただ日系史と言っても多くの文献があり、その数は膨大だ。そこでここでは教会史も織り交ぜて紹介できればと願っている。

北米での日本人の教会活動は明治元年の最初の移民から七年近い時間を経て始められたこともあり、そこに至るまでのしばらく間はアメリカ最初の移民、ジョン万次郎、ジョーゼフ彦という日本開国に貢献した人々から話を始めてゆきましょう。

徳川家康の外交顧問として活躍した人物に三浦安針がいる。彼はイギリス人で、ウィリアム・アダムスという名であった。家康は彼に命じて船を造らせ、それに乗って二三人の商人がメキシコのアカプルコにまで出かけている一六〇年のことだ。それから三年後、伊達藩の支倉常長がスペインに行く途中で、メキシコに立ち寄り、

その時に十人の日本人がメキシコに留まっている。それが最初の北アメリカ移住となっている。それはメイフラワー号がマサチューセッツ州のプリマス・ロックに上陸する十年も前のことである。しかし一六二〇年にはクリスタン禁制が發布されており、まだ海外にあつた支倉達の動向に関しては不明である。

さて、アメリカで最初に暮らした最初の日本人は何と言つても中浜万次郎であろう。一八四一年に土佐を出帆したが難船し、十三日後に無人島であつた鳥島に辿り着いたところをアメリカの捕鯨船に助けられたのであつた。万次郎十四才の時である。船長の好意でマサチューセッツ州でスクール・ボーイをしながら航海術を学んだ。彼はその間、日本に帰る資金を工面するために、ゴールド・ラッシュで全米の注目を集めていたカリフォルニアに行く。そのために

南米ホーン岬経由でサンフランシスコに着き、一人で三ヶ月間、砂金取りに精を出して六五〇ドルもの資金を手に入れている。鯨獲りでも一年働いて百ドルと言われるほどだから、これまた大金である。

恐らくゴールド・ラッシュに向向いた日本人としては彼が唯一の人物ではあるまいか。よくもまあ荒くれ者の徘徊するフォーティ・ナイナーズ（一九四九年にゴールド・ラッシュが始まったので、四九だけを取つてそのように言う）の最中で、命が守られたものだ。もつとも後述するジョゼフ・ヒコモ、三年後にサンフランシスコを訪れているが、その時にもまだゴールド・ラッシュの興奮が覚めやらぬ状況であつたと言つ。だが、

日本は一六二一年に徳川秀忠が鎖国を断行して以来、万次郎もまだ日本には帰れなかつたのである。万次郎が土佐を出る四年程前（一八三七年）にモリソン号は漂流してアメリカに収容されていた七人の日本人（岩吉、久吉、音吉等）を返そうと思つて浦賀と鹿児島に立ち寄つたのだが、「異国船打払令」によつて砲火を受けて空しく

引き上げている。彼らは二度と日本の地を踏むことがなかつたという。ちなみに音吉は上海一のビジネスマンとなり、「オットサン」と呼ばれていたそう。

でもギョツラフは彼らを通して日本語訳聖書ヨハネ伝の出版にこぎ着けるのだつた。それを見て、当時シンガポールにいた宣教師ヘボン（ヘップバーン）の目に留まり、やがて彼とブラウンの手によつて旧新訳聖書全巻が翻訳されてゆく。ギョツラフが最初の和訳聖書を出してから半世紀が経過している。やがて日本はこのモリソン号事件をきっかけにして坂を転がるようにして開国へと突き進んでゆく。

さて万次郎はハワイからアメリカ政府のパスポートを持つて一八五一年の初め沖繩に着き、アメリカのスパイだなどと言われながら一八六〇年の日米通商条約締結のために咸臨丸の乗組員として、三七日間かけて太平洋横断を手がけている。万次郎の航海術と英語がこの時ほど発揮された時はなかつた。彼は後の東京大学の英語の教授になつている。（５ページ下段へ）

「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」(ヨハネ三・八新共同訳) 聖霊というお方は、主イエスが言われたように人知をはるかに超えた不思議なことをされるお方である。私には

ある人々が言うような特異な聖霊経験、異言を語ったり、奇跡やしるしの伴う働きを未だに経験したことはない。そうした私に聖霊経験があるとすれば、それは一体どういう出来事だったか。

だれよりも若く関

西聖書神学校を卒業した私は、最初に母教会に派遣され本田弘慈先生のもとで牧師見習として指導を受けることになった。「神学校を出たら思い切りやってみせるぞ」という意気込みと計画は、思い通りには行かず、間もなく挫折してしまふ。欲求不満の原因は、教会掃除にあった。殊更きれいな好きの婦

聖霊とわたし

今わたしが 生きているのは

細見剛正 (引退牧師)

人の先生がいて、毎朝広い会堂の掃除に駆り出されていた。ある宣教師が私のことを「副牧師じゃなくて、あなたは拭く牧師だ」と笑われたのもその頃であった。「読書するの時間が無い。こんな筈ではなかった」と何かにつけて腹の立つ毎日を過していた。

それに加えて教会奉仕に来ていた口の悪い神学生がいた。陰で私の説教を酷評しているのを知り、私は無性に腹が立った。そしてこの腹立たしさは、更に自分自身へと変わって行った。私に牧師としての素質があるんだろう

か。こんな荒んだ気持ちで神のことの説教が出来るのか。牧師を志望したことがそもそも間違っていたのでは。そう思い悩んでいた時、私の事を知ったある牧師夫人が、「ここにお金があるから関西聖会が開かれる歌垣の静かな山荘へ行つて、祈つて来なさい。」と励ましてくださった。

この日から自分自身との格闘が始まった。断食をしたり徹夜の祈りをしたりして三日、四日と過ぎていった。身も心も疲れ果てて五日目の朝、私の心にもことばが与えられた。「わたしはキリストと共に十字架につけられています。生きています。もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。」(ガラテヤ二・二〇新共同訳) 今まで私を苦しめた問題は、外にあるとばかり思っていたが、私自身が元凶であることが分かった。そして主イエスがこの私を自身と共に十字架に釘付けにして殺し、更に私の内に宿って下さったことが明確な体験となった。どんな中傷も甘んじて受けよう。私を中傷した兄弟を心から赦そう。主が負わせて下さる十字架ならどんなことでも、喜んで背負わせていただく。

私は主のもの、ひたすら主に喜ばれるものでありたいと願うようになった。あの自己中心な肉体的な私をこのように変えて、伝道者のスタートラインに立たせて下さったのは他ならぬ聖霊のお働きであった。

(4ページ「北米日系史」より)

さて、もう一人ジヨゼフ・ヒコとして知られる浜田彦蔵がいる。万次郎と同じ境遇をたどり、一八五一年に十三歳でサンフランシスコに到着し、ボルチモアで帰化市民になっている。一八五四年にカリソニックで洗礼も受けている。鎖国後の日本人受洗第一号であった。その彼はアメリカの三人の歴代大統領に面会しているが、一八六二年に彼は領事館の通訳として任官を受けたので当時五三才のリンカーン大統領に会見しているが、彼に面会できたただ一人の日本人だといふ。この頃は全てが初めて尽くしだったのだ。

(2ページ「幻のない民は」より) なぜなら、それはバイリンガルという特徴があるからです。私たちのミッション・ステイトメントがそれを反映しています。私は、それぞれの教会が、この務めを果たすために、日英両語部をサポートする責任があると思っています。神様が私の心に示してください。たことを、皆さんと分かち合う機会を与えてくださり、ありがとうございます。

教団ニュース

南加宣教大会は三月一日、ウエストコピナ教会で行なわれました。北加宣教大会は三月八日、サンタクララ教会で行われ、徳永パウロ師を講師に迎え、アジア（日本）の文化を持つ人々にどのように福音を伝えるかについて学びました。

第六七回教団夏期修養会は七月五日（水）～八日（土）サンタバーバラのウエストモント大学で行なわれます。主題は「今日あるのは主の恵み」キリストの再臨に備えて」で、聖会講師は藤巻充師（日本ホーリネス教団・横浜教会牧師）です。登録受付中です。それぞれの教会の登録係にお申し込みください。

教団総会は七月十三日（木）～十五日（土）サンファンアンド教会で行なわれます。（七月十三日は教団正教師会）教団総会にむけて四月五日から「教団百日程」が始まっています。日々の祈りに、教団の課題を覚えてください。

教会ニュース

オレンジ郡教会では、昨年の9月からアーバインで第二礼拝が進められていて、韓国の宣教師のジエームス・パーク先生が協力して下さっています。現在は韓国教会の部屋の一部をお借りして毎週、日曜午後礼拝が持たれています。ホイツティア教会では、この三月に富山信先生が沖縄に赴任さ

れました。後任としてタルボット神学校の神学生パーク・ヒョンク先生が奉職され、四月二日にサンディエゴ教会の大倉信師立ち会いのもと、就任式が行われました。

ツーソン教会では、四月二三日に藤岡二郎師の司式により、玄仁師（ヒョン・イン、徳原仁師の韓国名、今後、韓国名を公式に使用します。）の就任式がもたれました。五月一日よりフルタイムミニストリーが開始されます。バイリンガルな教会ですので、英語の上達とミニストリーの祝福をお祈りください。

消 息

鈴木栄一師（ホノルル教会）は、三月一三日から六月一日までサバティカル休暇中で、その大部分を日本に滞在されます。吹上信一師は心臓の詰まった血管を拡げる手術を受けました。一時危険な状態になりましたが守られました。現在食事養生と軽い徒歩をしながら体力を回復しています。一年後に、もう一

つの詰まっている血管のためにバイパス手術が必要とのことです。引き続きお祈りください。元教団牧師・辻本清臣師は今年三月、日本際飢餓対策機構を退職、帰米されましたが、なお同宣教団体の特別顧問としてアジア諸国を歴訪しておられます。

通信員募集

「教会ニュース」を『靈聲』に届けていただく「通信員」を募集しています。各教会で通信員を選び、氏名とEメール・アドレスを編集室までお知らせください。

編集室から

長年休刊となっていた『靈聲』を、このたび、ようやく復刊させることができました。まずは年二回からはじめて、年四回の発行へと持つて行きたいと願っています。『靈聲』の継続的な発行は、諸教会からのニュースにかかっていますので、通信員の皆様とご指導くださる牧師先生がたのご協力をこころからお願いたします。編集室への連絡は reisei@omsholiness.org までお願いいたします。

教団所属教会

（カリフォルニア）

フリーモント教会
サンロレンゾ教会
サンタクララバレー教会
ウォーナッククリーク教会
ロサンゼルス教会
サンファンアンド教会
サウスベイ教会
ウエストコピナ教会
ウエストロサンゼルス教会

オレンジ郡教会
ホイツティア教会
サンディエゴ教会
ノースカウンティ教会
（ハワイ）

ホノルル教会
ウエストオアフ教会
ミリラニ教会
（アリゾナ）

ツーソン教会
（詳しくは www.omsholiness.org を参照）